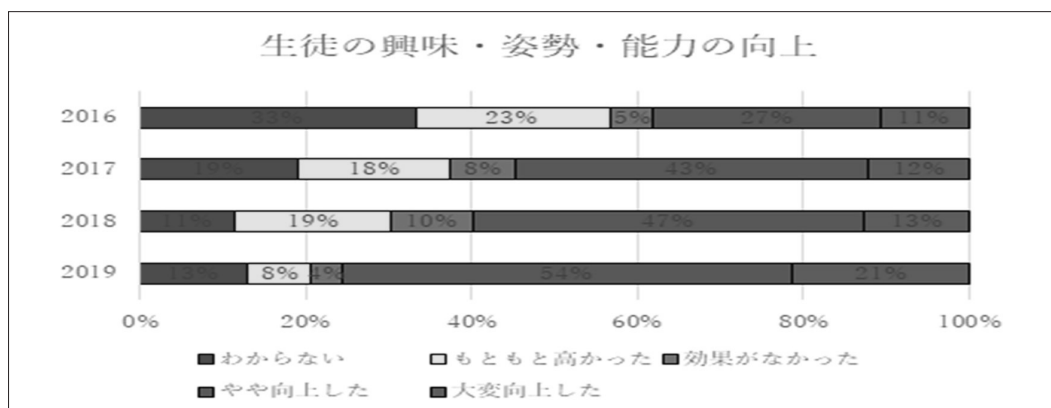


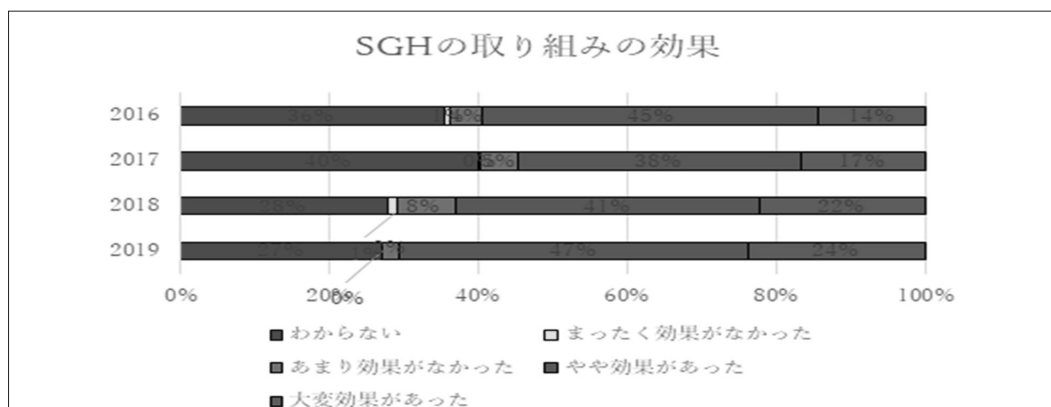
総合的な教員評価

三小田 博 昭



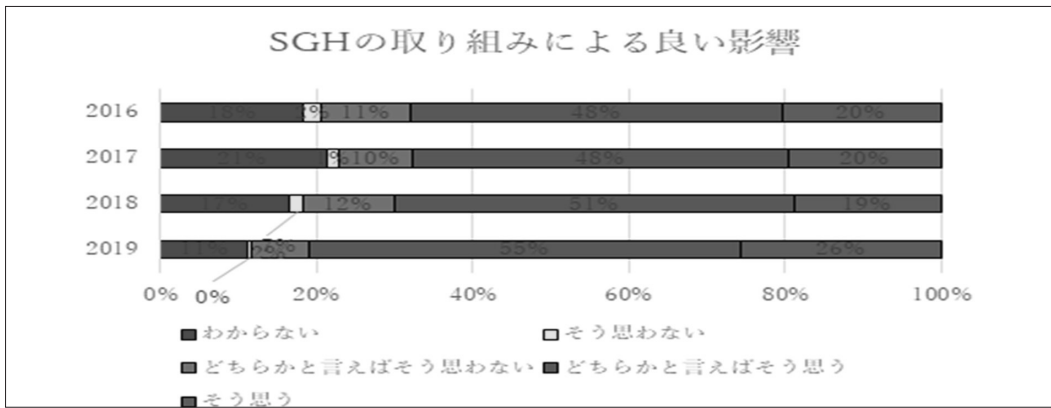
○ このグラフは、質問項目No5～No20を得点化したものである。グラフの変化からも分かるように、「生徒の興味・姿勢・能力の向上」に関して、教員は、年々向上していると感じていることがわかる。SGH当初は、SGHの効果が分からないと回答した教員が3割以上いたが、2019年度では1割程度にまで減少した。その逆に、「やや向上した」「向上した」と回答している教員が75%半数以上になったことから教員自身が、生徒の成長を感じていることが分かる。興味深いのは、2016年度では、

もともと高かったと回答した教員が約25%（4分の1）いたが、2019年度では、10%を切った。当初は生徒の能力を画一的に捉えていた傾向にあるが、SGH研究開発を行っていく中で、「生徒たちの能力」そのものを定義する内容が変化してきたと言うことが言える。つまり、SGH開始前に教員が生徒たちの「能力」だと捉えていた事項が、SGHで新に育成する「生徒たちたちの能力」とは異なっていたことを表している。



○ このグラフは、質問項目No21～No33を得点化したものである。この項目には「課題研究」や「グローバルディスカッション」「海外研修」「ALE」など、SGHの中心的研究開発項目に関するものが多く含まれる。SGH研究開発の中心となる事項に関するものである。2016年から、多くの教員は、SGHの取り組みに関して肯定的な意見を持っていることがわかる。初年次は教員自身の研究開発に対する意気込みや期待度も大きいため、教員の意識が高いことも研究開発を行う上でよくあることである。しかしながら、研究開発が5年経過した2019年

度においては「やや向上した」「向上した」と回答している教員が過去最高になっている。ましてや、初年次よりもその傾向が高くなっていることから、SGH取り組みの効果についての高い意識は、一過性のものではないことがわかる。すべての教員がSGH研究開発に携わっていることも、その理由の一つであると考えられる。しかし一方で分からないと回答している教員も一定数いる。どこの学校でもおなじだとは思いますが、転勤で本校に赴任してきたときに、すでにSGH研究開発が行われていて、従前との比較ができないからだと考える。



○ このグラフは、質問項目No35～No41を得点化したものである。この項目には「カリキュラム開発」や「教員の指導力向上」「教員間の連携」「地域連携」など、平成34年度から開始される新学習指導要領でもとめられる方について尋ねる項目である。「SGH取組みの効果」と同様に、2016年から、多くの教員は、SGHの取組みに関して肯定的な意見を持っていることがわかる。特に、SGH最終年度である2019年度は、80%以上の教員がSGHの取組みでよい盈虚があると考えていることがわかる」これは本校のSGH研究開発が、平成34年度から開始される新学習指導要領の方向性を精査して、SGH研究開発に取り組んだことが、教員の意識の向上につながっていると考えられる。